

今、日本が問われていること

しみず ひでゆき
清水 秀行

●日本教職員組合・書記次長

昨年10月、ドイツの年金・医療保険制度を視察する機会を得た。到着した3日は「統一記念日」の祝日で、中央欧州最大の空港をもち、ベルギーとともにユーロを発行する欧州中央銀行がある金融の国際都市フランクフルトはさわやかな秋空につつまれていた。

1883年、ドイツ帝国の宰相ビスマルクが強制保険（公的医療保険）を創設するため疾病保険法を制定し、世界で最初に社会保険を制度化した国であり、日本が健康保険制度をつくることモデルとしたことを初めて知った。公的医療保険は日本のような国民皆保険ではなく、財源は基本的に保険料のみで、近年、滞納等による無保険者が多く出て、2009年には全国民が公的または民間のいずれかに加入することが義務づけられ「逆転した保険料と給付の問題」への対応として保険料引き上げや給付カット等が検討されている。

年金制度は、公的な一般年金保険と私的なリスター年金がある。日本より早く少子高齢化が進行し、付加価値税19%でも財政は厳しく、12年から29年にかけて支給開始を65歳から67歳に段階的に引き上げることが決定している。社会保障と税の一体改革が十分に行われていない日本の将来に改めて不安を感じた。訪問した年金機構では、使用者と労働者が各々半数ずつ職員を派遣し中立性を担保している。また、年金の仕組みを説明するため企業・学校訪問を無料で実施しており、未納者が多い日本でも積極的に行うべきだ。

歴史好きな私にとって、フランクフルトでの

カール大帝の墓のある大聖堂や文豪ゲーテのゲートハウスの訪問は印象に残ったが、ポツダムや「ベルリンの壁」を訪れたことは、戦争、平和と人権との向き合い方を再び考える機会ともなった。

ヒトラーが政権を掌握して80年目のドイツでは、近年「ナチス時代は止むを得ないことだった」という風潮が出てきていることに強い危機感を感じ、「二度と繰り返さない」という決意のもと、ブランデンブルク門近くに『虐殺された欧州のユダヤ人のための記念碑』が新たに造られた。記念碑地下の「情報の場」では60万人を超える犠牲者一人ひとりの名前と経歴を読み上げている。6年余りの歳月がかかるという。森鷗外や北里柴三郎も学び、29人のノーベル賞受賞者を出した名門フンボルト大学の教授や学生が自らナチス思想を礼賛し、ユダヤ人やその著作物を排斥した歴史を忘れないため、教育では幼稚園児から大学生まで、ワイマール憲法の共和国時代から東西ドイツの統一までの歴史を必修として学んでいる。

日本も学ぶべきことがある・・・特定秘密保護法の強行成立、中立性が危ぶまれる教育委員会制度、マスコミ・公共放送の危機、ヘイトスピーチの横行、大阪国際平和センター（ピースおおさか）の展示内容の変更、そして『アンネの日記』が破られる事件・・・第2次大戦前の帝国議会議事堂に掲げられていた「ドイツのために」の言葉は、統一後に改装された連邦議会議事堂に「市民のために」の言葉に代えて掲げられている。